

女性胸部外科医へアンケートを実施 調査結果から見えてきたものは…

富永隆治
九州大学大学院循環器外科

日本胸部外科学会では臨床現場での若手医師の過重労働を改善するために種々の方策を検討してきた。

そのひとつとして、女性医師の胸部外科領域への参画を促すため、胸部外科医処遇改善委員会の下に、「女性医師の労働環境を考える支援ワーキンググループ」が作られた。女性医師は年々増加の一步をたどり最近では卒業生の30%以上を占めるようになり、全体的に見ても15%程度が女性医師であるのに対し、胸部外科学会では女性会員は全会員の5%にも満たないため

である。今回、女性胸部外科医に対し、現状の把握と彼女たちの意識調査を目的にアンケートを行った。

回答者の半数は心臓外科医であり他の半数は主に呼吸器外科医で年齢層は30歳代が過半数で未婚率は60%であった。結果として特筆すべきは彼女達の胸部外科に対する想いの強さであった。男性医師でもハードとされる胸部外科を「やめたい」と答えた人はわずかに3%（図1）、胸部外科を選択して後悔しているかとの問いには83%が「していない」とし（図2）、もう一度医師になってどこかの診療科を選択するとしたらとの問いに、43%は胸部外科を選択すると答え、選択しないと答えた34%を越えていた。

そこには胸部外科の仕事に生きがいを感じ、決して良好とはいえない労働環境の中（図3）、苦しくとも、一流の胸部外科医になろうとする女性胸部外科医の強い意思が感じられた。

学会の推薦評議員女性枠或いは理事会における女性枠の設置に関しては「必要である」「不要である」が半数ずつで、女性というこ

とで特別に枠を設けるのではなく、きちんと評価した上で役員に選んではしいという意見が目立った。

専門医資格、正会員資格に関しても男性医師と同等でよいとするものが90%を越えていた。ここには女性というだけで条件を甘くして欲しいという要求は微塵も無く、凛とした、芯の強い日本女性の姿が浮かび上がる。この一方、学会の女性医師に対する支援策は必要とするものが80%を越え、特に妊娠、出産、育児に関連して、フレックスタイム制の導入（図4）を始めて、職場の労働環境整備（女性専用の当直室（図5）、更衣室（図6）、託児所の設置子育て支援（図7）等）を訴える意見が多かった。

学会は勿論のこと、それぞれの病院においても、これらの意見に真摯に耳を傾け、労働条件を改善し、女性胸部外科医が出産、子育てをしながらでも仕事が続けられるように早急に対策を講ずべきである。

先日の日本外科学会でも女性医師の問題は大きく取り上げられ、一般演題、シンポジウムと朝から夕方まで丸一日時間が割かれていた。日本小児外科学会理事、長、九州大病院長を歴任し、現在九州大学理事の水田祥代氏がシンポジウム最後に、「妊娠、出産、育児は女性にしかできないこと

であり、何物にも要えがたくすばらしいことである。たとえそのことで外科医としての修練が同期のものより遅れたとしても構わぬではないか。子どもと言っかけがえのないものを手にしたではないか。

また妊娠育児中でも勉強はできるし、遅れても必ず一流の医師になれる。焦らず初志を貫徹することだ。ただシステムとして女性医師にとって不備があれば病院の設備等改善する必要がある。特に妊娠出産・育児後の復職に関しては国を挙げて取り組む必要がある。」とコメントされた。

図1 胸部外科を続けることに関して (回答数: 92)

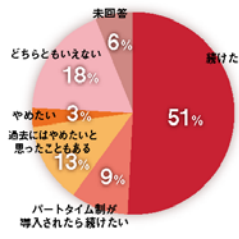


図2 胸部外科を選択して後悔しているか (回答数: 92)

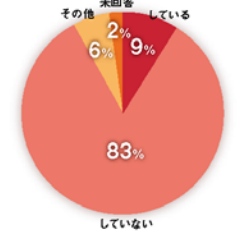


図3 現在の労働環境について (回答数: 92)

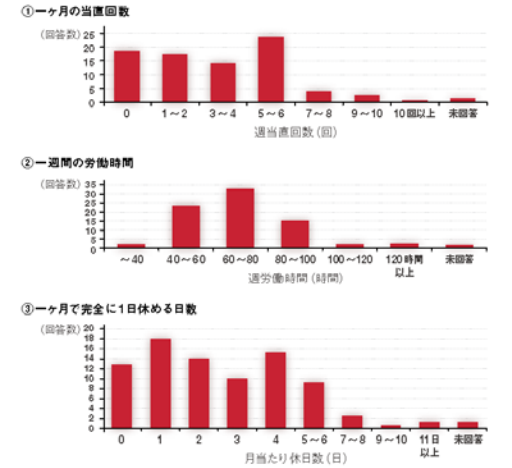


図4 妊娠出産育児に関連するパートタイム制度導入について (回答数: 92)

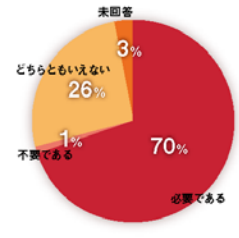


図5 女性専用の当直室、洗面室がなかった経験があるか (回答数: 92)

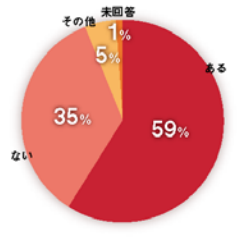


図6 女性専用更衣室、ロッカーがなかった経験があるか (回答数: 92)

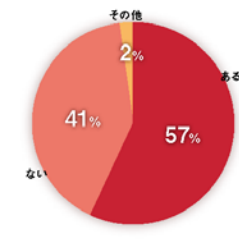


図7 職場は育児休暇が取得しやすい雰囲気か (回答数: 92)

